

1/23 ルカの福音書 18 章 9-14 節「自分を高くする者は低くされる」

小池 宏明牧師

このたとえ話は、聞くべき対象者が明らかにされている。9 節「自分は正しいと確信していて、ほかの人々を見下している人たちに、イエスはこのようなたとえを話された。」直接的にはイエス様と敵対して、殺意を抱いている律法学者やパリサイ人たちを対象にしているだろう。しかし、他人と比べたり批判したりすることは、いつの時代でも、どんな人にもでも起きていることなのだ。

*パリサイ人とその祈り

ここに登場しているパリサイ人は以下のように祈っている。「私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します」(11 節) 彼は他人と自分を比較しては見下し、自分だけが正しいと自慢している。これは、本当に、主なる神様に向き合っている祈りではなく、自己中心な「独り言」である。私たちは、似たような祈りをしていないだろうか。私たち人間は、すぐに人と比べてしまうが、神様は比べるお方ではない。神様は一人ひとりを見てくださる。そして、人の価値や評価は人間が決めることではなく、私たちのすべてをご存知であられる主なる神様が、お決めになることなのだ。

*取税人とその祈り

このたとえに出て来る取税人は、強烈な罪の自覚を持っていた。13 節「取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』」彼は胸を叩き続けて、自分が「罪人」であることを認めている。そして神様に、ただ、あわれんでください、とひたすらあわれみだけを求めている。実にシンプルな祈りだ。そして、14 節「あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」何も飾らずに、誰とも比べることもなく、ただ、自分の罪を告白して、あわれみを求めた祈りが、主なる神様に受け入れられた。そして、この取税人が正しい者とみなされて、罪赦された。先のパリサイ人ではない。

*神に受け入れられる祈り

誰であっても、主の御前で、高ぶる者は退けられ、低く謙る者が高められる。主なる神様は私たちの心の中をよく知っておられる。口先では、誰もが同じような言葉で祈ったとしても、心の中の謙る姿勢は、主なる神様だけが見通しておられる。今回、私たちの祈りの姿勢、心の姿勢が、主の御前でどのようなものなのか、吟味するように求められている。